

救われた命 今度は私が

福知山線脱線で重傷 作業療法士が災害リハビリ

2005年4月25日のJR福知山線脱線事故で両脚に重傷を負った作業療法士の中野皓介さん(30)(大阪府摂津市)が、災害関連死などを防ぐ「災害リハビリテーション」の普及活動を始め。志をともにし、背中を押してくれるのは、事故の10年後に再会した当時の執刀医。救われた自らの命をかみしめ、「災害で傷ついた人々を支える」との決意を胸に刻む。



災害時のリハビリに関する普及活動への助成が決まり、贈呈書を受け取る中野さん(左)と富岡さん(3月23日、大阪市北区)――吉野拓也撮影

執刀医と活動「被災者守るのが使命」

事故当時は作業療法士を目指して大学に入ったばかりだった。通学で乗った2両目で体が飛ばされ、気付くと折れ曲がった車内で両脚が挟まれていた。4時間半後に救出されたが、筋肉の細胞が壊れ、腎不全などを引き起こす恐れがあるクラッシュ症候群と診断され、兵庫県災害医療センターで緊急手術を受けた。もう歩けないかもしれない。不安になった時期もあったが、病室の担当医は昼夜を問わずに訪れ、足の裏をくすぐって「神経は通っている。安心して」と励ましてくれた。患者として心身を支えられたことで、目指す道への志を強くした。

それから5年後、国家試験に合格。大阪府の摂津市保健センターに就職し、お年寄りや障害を持つ人の機能回復を手助けするうち、関心を寄せるようになったのが、災害時のリハビリだ。

東日本大震災後、長引く避難生活で体を動かす機会が減り、身体機能が損なわれる高齢者がいると知った。事故後に体が動かさず、回復に苦しんだ経験を重ね、「いつか役に立ちたい」と思うようになった。

中野さんは15年1月、大阪で開かれた災害リハビリの研修会に初めて参加した。講師は10年ぶりに見る名前。あの緊急手術を執刀してくれた富岡正雄医師(54)(現・大阪医科大学准教授)だった。面影を頼りに声を掛け合った。

☐ 災害リハビリテーション 災害発生時、被災前からリハビリ医療を受けていた高齢者や入院患者に対応するほか、避難生活で体が動かさなくなることで身体機能が低下する「生活不活発病」、エコノミークラス症候群などによる災害関連死の予防にあたる。

事故当時、救急医療が専門だった富岡さんは東日本大震災後、医療チームの一員として岩手県へ。避難所の高齢者と接してリハビリの重要性を感じ、その活動に力を入れていた。

ずっと命の最前線に立っている。脱線事故の治療にあたり、今も災害現場で被災者と向き合う情熱に触れ、中野さんは「奮い立った」という。

昨年4月の熊本地震後、富岡さんが募った派遣メンバーに手を挙げた。熊本県宇城市で4日間、エコノミークラス症候群を防ぐ体操教室などを行いながら避難所を回り、「被災者の視点に立てば、やれることはまだまだある」と感じた。

昨年10月、全国組織「大規模災害リハビリテーション支援関連団体協議会(JRART)」の地域支部「大阪JRART」が発足した。事務局長の富岡さん、メンバーの中野さんが中心となり、JR西日本が脱線事故を機に設立した財団法人からの助成が認められ、今年度は月1回の研修会やシンポジウムを開くことになった。普及啓発の必要性を感じた中野さんの提案だ。

「自分が生きていて良かったのか」。中野さんは迷いながらも多くの人に支えられ、今は支える側になった。「災害被災地にはその後、続く苦しみがある。被災者の命や生活を守ることが、事故後も生きてきた自分の使命」と言う。

見守る富岡さんは「事故のつらい経験と向き合い、ケアをする側に戻るには勇気がいる。彼の決断を後押ししたい」と話している。